

## 鳩は鳥よりもやさしく、鳥は九よりもやさしい

小学校教師としての十四年間に担任した子供たちの中で、最も知能の低かったのがY君でした。一年生を終わっても、かなが一文字も読めるようになれなかった子供です。漢字は百字くらい覚えましたが、「一」や「二」という漢字は読めませんでした。

ところが、一般にそれよりも難しいとされている雪や雲という字は、決して間違えませんでした。余り自信あり気に答えるものですから、「Y君、雪はくもという字じゃあないのかい」と言って自信を覆そうと試みるのですが、決して答えを <sup>ひるがえ</sup> 翻 しませんでした。

「一や二のように、外見はどんなにやさしそうに見えても、内容の抽象的な文字は難しく、反対に、外見ではどんなに難しそうに見えても、具体的な生き生きとした内容を持った漢字はやさしいのだ」ということを、Y君は私に教えてくれました。

幼児は、だから、鳩でも蟻でも容易に覚えます。その字が、生き生きと幼児の目に訴える実在を表わした字だからです。それに比べると、鳥や虫という言葉は、幼児には理解しにくい言葉です。鳥という鳥は実在

しませんし、虫という虫は実在しないからです。

ところが、親でも教師でも、初めは鳥や虫という言葉を使って、鳩や蟻という言葉を使いません。蟻も虫、蝶も虫、蠅も虫と教えます。これでは虫とはどんなものか解らなくなってしまう。だから、子供が塵を拾って「虫、虫」と言うのだと思います。

子供には、鳩は鳩、鶴は鶴、蟻は蟻、蝶は蝶と言って教えてやるべきです。しかも、それを漢字で教えてやりますと、子供は、すぐに、鳩と鶴は同じ仲間、蟻と蝶、が仲間であることを理解し、鳥がとり、虫がむしで、鳥や虫はそれぞれの仲間を総括する上位概念であることを理解します。このように、具体物の理解を通して、初めて抽象的な概念を理解する能力が育っていくのです。